

〔書評〕

信田敏宏（著）『周縁を生きる人びと—オラン・アスリの開発とイスラーム化』
（京都大学東南アジア研究所 地域研究叢書 15）、京都：京都大学学術出版会、
2004 年、472 頁、5100 円（税別）

富沢寿勇（静岡県立大学）

本書は、東京都立大学大学院社会科学研究所に提出された博士論文（2002 年）を修正・加筆したものである。これは 1995 年から 98 年までの期間における半島部マレーシア、ヌグリ・スンビラン州での人類学的フィールドワークの詳細なデータを土台とし、さらに 2001 年の短期訪問による補完調査によって、とりあえず到達された著者のオラン・アスリ研究の成果である。「とりあえず」とここでわざわざ記すのは、著者の同研究は今後ますます精力的に展開されて行くであろうことが、本書の意気込みから十分予想されるからである。

周知のように、オラン・アスリ(Orang Asli)は、マレー半島部に居住する先住民の総称であり、そのうち本書で対象とされるのは、主にムラユ・アスリ系のトゥムアン(Temuan)という名称で呼ばれてきた人々であるが、オラン・アスリの人々が「元来は他称であるオラン・アスリを自称として用いる傾向」(p.31)を重視する著者は、調査地の人々について言及する場合も一貫して「オラン・アスリ」を意図的に使用している。これは、国家による開発政策やイスラーム化政策に翻弄されてきた「周縁を生きる人々」としてのオラン・アスリ全体に共通の課題を、調査地での集約的な民族誌研究を通じて解明しようとする著者の方法とも呼応するものと思われる。

本書は、以下のような章構成と展開になっている。

序章

第 I 部 オラン・アスリの概況

第 1 章 オラン・アスリ—森、開発、イスラーム化

第 2 章 オラン・アスリの歴史とオラン・アスリ政策

第 II 部 ドリアン・タワール村の生活世界

第 3 章 ドリアン・タワール村の<風景>

第 4 章 ドリアン・タワール村の歴史

第 5 章 ドリアン・タワール村の社会関係

第 6 章 ドリアン・タワール村の経済関係

第 7 章 森を再利用する人びと

第 III 部 イスラーム化をめぐる出来事

第 8 章 解決されないインセスト

第 9 章 「間違った結婚」をめぐるポリティクス

第 10 章 改宗と抵抗

第 11 章 する側の論理とされる側の論理

第 12 章 結論

まず序章では、調査研究の方法、開発とイスラーム化への着眼点、オラン・アスリ研究史上の本書の位置づけ、特徴と構成が提示される。1 章ではオラン・アスリの概念説明・概況と、トゥムアンの位置づけ、アイデンティティの問題等が、続いて 2 章ではヌグリ・スンビラン州のオラン・アスリおよび同政策の歴史と現在が解説される。特にかれらを対象とする従来の国民「統合」政策から、イスラーム化を通じてのマレー人への「同化」政策への転換が近年見られるが、他方、法制度的次元ではマレー人との差異化が依然持続する矛盾した現状が示される。この I 部のマクロな概況説明に続いて、II 部以降では、ヌグリ・スンビラン州、ジェルブ地域のだリアン・タワール村（仮名）を中心としたミクロで詳細な民族誌が展開する。同村はオラン・アスリ局長官を務めたバハロンによる調査（1971-72）が行われた村でもあり、その後、開発政策のモデル村となった。著者は同村の<風景>、歴史、親族関係と「母系的アダット」との関係や村の人々の範疇化、ゴム採液やドリানের換金活動を中心とした生業経済の変容の現実等を念入りなフィールド・データを基に提示して行く。そして III 部では、同村をマクロな国家との関係性という脈絡の中で改めて考察し、特に国家主導のイスラーム化という、いわば「上からのイスラーム化」に対するオラン・アスリ側の「される側の論理」やこれに基づく限定的ながら、かれらなりの能動的、主体的な対応に焦点を当てつつ、村におけるイスラーム化に伴って起きたさまざまな出来事を記述・分析して行く。特に本書の考察の中心をなし、繰り返し強調される点は、1970 年代からの開発プロジェクトの恩恵を受けた「上の人びと」と、そこから取

り残された「下の人びと」という、いわば村びとの階層化が進行したこと、他方、80年代以降イスラーム化政策と連動するようになった開発政策の恩恵を受けようと、「下の人びと」の中には、特に90年代後半からイスラームに改宗する人々が出始め、これによって階層秩序が脅かされることを恐れる「上の人びと」は、イスラームへの対抗原理としてのアダットを強調して、イスラーム化に抵抗・拒否する姿勢に転じているという皮肉な現象である。

472頁余りから成る本書は、本論だけでも411頁に図表51点、写真41点を含む力作であり、その情報の厚みをこの限られた紙面で満遍なく紹介することは不可能である。率直に言って、この大著を通読した直後、評者は深く大きなため息をついて、この著者は恐るべき記録魔であるという印象が強く残った。特にII部の村の周辺や村内景観、生活世界、親族関係、ゴム採液やドリアン収穫、III部における村の出来事における個々人や人間関係の記述等、微に入り細をうがつ記述がこれでもか、と言わんばかりに次から次へと連続して展開している。生活の仔細へのこだわりは、ある意味で民族誌本来の持ち味であるが、どの程度の仔細に我々は満足するべきか。ちなみに、いかに徹底して詳細な民族誌を試みたところで、所詮表象行為であることは逃れない。その意味で、読者の中には、もう少し論旨に沿ってデータを整理してくれたらどれだけ読みやすいだろう、と感想を抱く人も少なくないかもしれない。しかし本書を読み進めて行くと、著者の主たる関心はどうも一時的な分析・考察自体より、むしろ、ともかく調査地の人々の現在の生活世界を徹底的に、かつ粘り強く記録して、「第一次的な歴史資料」(p.19)を構築することにあつたのではないかと判断されてくる。ちなみに、本書は、著者の別稿(2004年)で、これまた同地域の人々の生活の仔細を描いた論考と共に、第4回東南アジア史学会賞を受賞した。この事実は、上記のような著者の姿勢と方向性が、当該学会においても適正なものとして受容・認定された一つの輝かしい証しとすることができる。

また、マレーシア研究の視点から本書が特に評価されてしかるべき所のひとつは、いわゆる多民族社会／複合社会(plural society)パラダイム(依然として、いかに多くのマレーシア研究がこの複合社会モデルに依拠して再生産されていることか!)に基づく固定的、静態的な民族観の陥穽をおそらく積極的に打破すべく、オラン・アスリを中心に、マレー人や華人、等々相互間の民族間境界の曖昧性や、「異種混濁的な周縁世界」(p.396)で特徴づけられる現代マレーシア社会の一端の現実を、読者が実感をもってとらえることができるように工夫して記述している部分である。たとえば、本書の中心人物バティン・ジャン

グット自身の出自の混淆性(p.42)は象徴的であるし、またオラン・アスリのハリ・ラヤの過ごし方がマレー・ムスリムのみならず、華人やキリスト教徒たちのそれぞれの生活暦と連動し得る事実や(p.144-5)、オラン・アスリの生業暦が華人の年中行事と連動している事実の記述(p.193)などはその端的な例として興味深い。その意味で、本書は単なるオラン・アスリ研究の専門書としてのみならず、現代マレーシア社会研究一般の入門書的作用も果たし得るであろう。

最後に、著者と同じくヌグリ・スンビラン州をフィールドとして、しかし「周縁」からの視座の著者とは正反対に、いわば同マレー社会の「中心」としての支配者文化を考察してきた評者の立場から一つ注文をつけておきたい。本書では現代オラン・アスリとマレーシア国家の開発政策、イスラーム化政策との相互関係に主な焦点が当てられ、オラン・アスリ側の、国家に対する限定的ながら主体的な対応ぶり、あるいは「逆に国家政策を馴化」しようとする試み(p.360)が示されている。しかし、この点では、村とマレーシア国家の中間領域としてのヌグリ・スンビラン・マレーの政体との関係についての考察が、比較的手薄な印象が強い。たとえば評者は、現代ヌグリ・スンビラン・マレーの政治文化の底流としての王権神話・儀礼等が、「先住民」概念や現実の「先住民」そのものをさまざまな象徴形式で取り込み、いわば馴化する仕組みを念入りに構築してきたことを指摘している[富沢 2003年]。このことを考慮すると、開発とイスラーム化をめぐる調査地のオラン・アスリとマレーシア国家の相互作用の過程において、二者間の単純化された関係にあきたらず、その中間的な位置を占めるヌグリ・スンビラン・マレーの政体がどのようにこれに介在し、三者間でいかなる錯綜した「攻防」が展開してきたのか、著者の一層緻密な記述と分析に今後の期待をしたい。

(参考文献)

富沢寿勇『王権儀礼と国家—現代マレー社会における政治文化の範型』東京大学出版会、2003年。

信田敏宏「ドリアン・タワール村の生活世界—マレーシア、オラン・アスリ社会における階層秩序と世帯状況」『国立民族学博物館研究報告』29巻2号、201-306頁、2004年。